通れないほど道を埋め尽くす遺体を見た沖縄戦　ウクライナの映像は「自分ごとのように苦しくなる」と体験者

2022/6/24 沖縄タイムス

サイパンで亡くなった父やきょうだいの名前が刻まれた礎の前で、あふれる涙をハンカチでぬぐう与那城春子さん＝２３日、糸満市摩文仁（沖縄タイムス）

慰霊の日の 23 日、糸満市摩文仁の平和の礎などを訪れた沖縄戦の体験者たちは、ロシアの侵攻を受け甚大な被害が出ているウクライナを 77 年前の沖縄と重ね、改めて反戦を誓った。「ウクライナの映像を見ると昔を思い出す。自分たちも同じ目に遭ったから」

家族で北部へ避難中に艦砲射撃を受け、目の前で姉を亡くした那覇市の赤嶺清光さん（83）はそう語った。

10・10 空襲、機銃掃射など当時の記憶が鮮明によみがえる。姉や防衛隊に駆り出され戦死した父の名を刻んだ礎の前で、約 3 分間の長い祈りをささげ「ただただ平和を願う」と静かに語った。

サイパンの壕で「集団自決（強制集団死）」に巻き込まれ、父ときょうだい 6 人を亡くした名護市の与那城春子さん（91）は、礎の前であふれる涙をハンカチで拭った。「なんで戦争なんか起こすのか。絶対にしてはいけない」と語気を強めた。

沖縄戦で父を失った与那原町の知念弘子さん（80）は戦禍のウクライナ市民の映像を「自分ごとのように感じ、苦しくなる」。戦後も苦労を重ねた母の姿を思い返し「父の顔も知らない私たちのような犠牲を出してほしくない」と願った。

糸満市の金城守正さん（86）は沖縄戦時、8 歳。「人が通り切れないほど」道を埋め尽くす遺体を目の当たりにした。真栄平の壕では、投降を呼びかける米兵の声の後に爆発音が響き、入り口にいたいとこ 2 人が犠牲になった。ウクライナの現状を「沖縄戦とは全然違う」と語りつつ「戦争を人間が一番やってはいけないということは同じ」と強調した。

糸満市米須の魂魄（こんぱく）の塔を参拝した南城市の佐久真テル子さん（91）は、沖縄戦で避難中に離れ離れになった祖母を亡くした。「世界の偉い人はなぜ、戦争を止められないのか。二度と沖縄のようにはなってほしくない」と願った。